東日本大震災9年

東北の教訓を"未災地"へ

全国被災地語り部シンポから

宮城・南三陸町

風化防止と伝承の人材育成誓う

東日本大震災からまもなく9年。災害の教訓を世界に発信する「第5回 全国被災地語り部シンポジウム」が2月24、25の両日、宮城県南三陸町の南三陸ホテル観洋で開催された。東日本大震災や阪神・淡路大震災を経験した「語り部」らが、震災の記憶と伝承を巡り、議論や発表を行った。＝東日本大震災取材班

会合では冒頭、東日本大震災時、国土交通省東北地方整備局長を務めていた徳山日出男・政策研究大学院大学客員教授が「教訓が命を救う―『語り部』のもつ尊い使命」の題で基調講演した。

その中で徳山氏は「災害列島に生きるという自覚をしっかりと持ち、次の災害に備えることが大切だ」と強調。

次いで、語り部の未来と多様性などをテーマにパネルディスカッションが開かれた【写真】。

岩手県釜石市の旅館「宝来館」のおかみ、岩崎昭子氏は、自身が大津波にのまれながらも、九死に一生を得た被災体験を宿泊客に伝える取り組みを紹介。岩崎氏は「命を守るために、自らの思いと経験を伝承する責務を果たす」と力を込めた。

3・11後から、被災者支援やまちづくりに従事する宮城県気仙沼市の小野寺憲一震災復興・企画部長は「まちの復興と同時に、記憶の風化を防ぐことが重要」と指摘。その上で、語り部の存在に加え、震災の遺構や伝承施設など多種多様な体験の提供の必要性を訴えた。

東北の被災地で生きる人々を追ったドキュメンタリー映画『一陽来復』の尹美亜監督は「語り手が抱く〝同じ思いをしてほしくない〟という感情は、聞き手の心にずっと残るから、ありのまま語ってほしい」と述べた。

シンポジウムには、全国各地から約420人が参加。2日目のクロージングセレモニーでは、北淡震災記念公園（兵庫県淡路市）の米山正幸総支配人の呼び掛けで、「命を守るため、被災地の教訓を未災地と未来に伝え、次世代の語り部の育成に努める」などとした「全国被災地語り部宣言」を採択した。

語り部ツアー

震災遺構で津波の脅威学ぶ

南三陸ホテル観洋による「語り部バスツアー」も運行された。今回は、気仙沼市と南三陸町の二つのコースが用意され、参加者は3・11の被災現場を巡った。

南三陸町では、震災遺構の「高野会館」で、津波の爪痕が生々しく残る建物内を見学。

案内した同ホテルの伊藤文夫渉外部長は「発災時、従業員の決断で館内にいた高齢者らを屋上に避難させ、327人の命を救った」と説明【写真】。

一行は、高台にありながら巨大津波の被害を受けた旧戸倉中学校（戸倉公民館）などを訪れた。

事例発表

紙芝居を使い防災教育

同シンポでは、語り部による事例発表も行われた。一般社団法人復興みなさん会（南三陸町）の一員として、震災の伝承活動や防災教育にあたる工藤真弓氏が登壇。

工藤氏は、幼少期に津波など自然の災害について学ぶ必要性を強調。一例として「紙芝居を使い『大きな波が来たら、迷わず高台まで逃げよう』と視覚で訴えると、子どもは津波の怖さを理解するのでは」と述べた。

また、幼児向けにナマズのくしゃみで起こった津波から避難する場面を描いた紙芝居【写真】を自作し、伝えている様子を報告した。